他人事にしてはいけない

校　長　　武井　正明

昨日の朝刊に横田早紀江さんが 90 歳になられた記事が載っていた。
その見出しにはこうあった。「何でこんなにのんきなの」…普段は気楽に使っている「のんき」という単語が、早紀江さんの、今の日本という国の鈍感さと他人事さに対しての、恨みと精一杯の柔らかい皮肉のように、私には伝わった。

横田めぐみさんが拉致されたのは、48 年前 11 月。彼女は私の２個上、中学１年だった。
早紀江さんの時は、ずっとそこで止まったままだ。家族５人の温かく楽しい生活が、めぐみさんが神隠しのようにいなくなったその日から、全く別のものに変わってしまった。当時は、まさか北朝鮮がそんな非道をするなんて、想像すらできなかった。

拉致された現場を通りかかると、本当にここでそんなことが起きていたなんて信じられない。善良な一市民の人権を蹂躙する大犯罪が、この新潟で実際に起きていた。
今のように、防犯カメラが至る場所に設置されている環境だったら、起こらなかったことかもしれない。いきなり暗闇で目隠しされ、真っ暗なまま船に乗せられた、めぐみさんの恐怖と孤独と、その後の絶望や悲しみは、いかばかりだったろう。

この報道がある度に、私は何とも言えない後ろめたさを感じてしまう。それは結局、こんなに苦しんでいる人がいるのに「お気の毒」という一言で、他人事にしてしまっている自分がいるからだ。

もし、これが自分の娘だったら、と想像するだけで胸が苦しくなってくる。
早紀江さんは、この長きに渡って、亡くなった御主人や息子さんたちと戦ってきた。
これが自分だったら、こんなに理性を保って、感謝の言葉さえ口にしながら、全国各地で粘り強く、訴え続けることができるだろうか。
今、全国の政治家たちは「国民生活のために」と連呼しながら、死に物狂いで選挙活動をしているが、その真剣さで、この拉致問題に取り組んでくれた政治家が、これまで何人いたのだろう。心のどこかで「やっぱり無理だ」と思っているのではないか。

早紀江さんに残されている時間は、もう長くない。
何とかして、めぐみさんに一目でも、会わせることはできないだろうか。
こんなに切ない思いを抱き続けている人を、怒りと絶望と無念のまま、見捨ててしまっていいのだろうか。

また何もできない自分に戻る。
政治家の人たちにすがるしかない。本当になんとかしてもらえないだろうか。